

はたらく二少年

小川未明

青空文庫

あたらしい道みちが、つくりかけられていました。おかをくずし、林はやしをきりひらき、町まちの中なかを通とおつて、その先さきは、はるかかなたの、すみわたる空そらの中なかへのびています。そこには、おおぜいの労働者ろうどうしゃが、はたらいていました。

トロツコが、ほそいレールの上うへを走はしりました。道みちばたには、大きな土管どかんがころがり、くだいた石いしや、小じやりなどが、うずたかくつまれていました。

はたらくものの中なかには、年としをとったものもいれば、まだわかいものもいました。かれらはシャベルでほった土つちをトロツコへなげこんだり、つるはしをかたい地面じめんにうちこんで、溝みぞをつくつたり

しました。こうして、しごとをする間は、たがいに口をきかなか
ったけれど、自分をなぐさめるために、無心で歌をうたうものも
ありました。

やがて正午になると、近くの工場から、汽笛がきこえま
す。すると一同は手を休めて、昼飯を食べる用意をしました。
それからの一時間は、はたらく人々にとつて、なによりたのし
かったのです。

ふたり少年は、石へこしかけて、秋の近づいた空をながめ
ていました。

「そんなら、Kくんは小さいときに、家を出たんだね。」と、N
がいました。

「そう、母親ははおやがなくなると、父親ちちおやはちつともぼくたちをかま
 ってくれなかったから、どこかへいけば、母親ははおやのかわりに、や
 さしくしてくれる人ひとがあるうかと思おもつてね。」と、Kケーが答こたえまし
 た。Nエヌはうなずきながら、

「わたしは、ちようどきみとははんたいで、父親ちちおやの顔かおをおぼえ
 ていない。まったく母親ははおやの手て一つで、大おおきくなつたのさ。その
 母ははの手てだすけもできぬうちに、母ははは死しんでしまった。」

「かんがふと、二人ふたりとも不幸ふこうだったんだね。」

「世よの中なかには、両りょう親しんがそろつて、こんな悲かなしみを知らしないも
 のもあるんだが。」と、Nエヌはたばこに火ひをつけました。

「それでもまだきみには、やさしいおかあさんがあつたからいい。

さびしいときは、いつでもおもかげを思いだして、自分をなぐさめることもできるから。」といって、Kは自分の子どものころのことを話したのでした。

いつも、ぼくはさびしい子どもだった。ある日、桑畑で、いくたりかの女が桑の葉をつんでいるのを見た。なんでもその葉はどこかの養蚕地へおくられるというのだった。むすめもいれば、おばさんもいた。その中に、白い手ぬぐいをかぶった、やさしそうなおばさんがあった。ぼくは、こんなようなおかあさんがおればいいなああと、なんとなく、したわしい気がして、そのそばへ行って、桑をつむてつだいをした。おばさんは、ぼくの頭を

なでてくれた。

このお婆さんは、いい声こえで歌うたをうたった。その声こえをきくと、ぼくは悲かなしくなつてしぜんに目めからなみだがながれた。そして、お婆さんが木きから木きへかわるたびに、ぼくはかごのかたすみを持つもてやった。みんなの前まえで、はずかしいのをがまんして、すこしでもお婆さんの手てだすけになろうと思おもつた。

そのあくる日ひ、桑くわばたけ畑かえへいくと、もうここの仕事しごとはおわつて、みんなが、昼ひるすぎは帰かえるのだという。ぼくは勇気ゆうきを出だして、

「お婆さんのおうちは、どこなの。」ときいた。

「ぼっちゃん、遠とおいのですよ。あつちの港みなとまち町まちです。もし、あつちへいらしたら、およりくださいね。わたしのうちは、停てい車しゃ

じょう
場のすぐ前まえですから。」と、おばさんが教おしえてくれた。

それから後のちも、ぼくは桑くわばたけ畑はたけへいったがまったく人ひとかげがなかつた。北きたの方ほうへたれさがる水色みずいろの空そらをながめっていると、どこからか、ほそい歌うた声こゑがきこえるような気きがして、ただぼんやりたたずんだ。

ついに、ぼくは、ある日ひのこと、ほこりをあびながら、白しろくかわいた街道かいどうを歩あるいていった。港みなと町まちへいけば、おばさんにあえると思おもったのだ。いつしか夕日ゆうひは松まつ林ばやしの中なかにしずみかけた。もう足あしはつかれて、これから先さきへいくことも、またもどることもできなくなつて、道みちばたでないていた。そのとき、そこを通とほりかけた自じてん転車しゃが、ぼくを見みるとふいに止とまつて、

「おい、K^ケぼうじやないか。」と、声^{こえ}をかけた。

それは、近^{きんじよ}所のおじさんだった。

「どうして、こんなところへきた。おとうさんといっしょよか。」
と、おじさんはきいた。

ぼくが頭^{あたま}をふると、おじさんは、ふしぎそうに、ぼくを見るの
で、

「海^{うみ}を見^みたい。」と、ぼくはいった。

「あはは、ばかめが。海^{うみ}までまだたいへんだ。さあ、早^{はや}くこれに
のれ。いっしょに家^{いえ}までつれて行ってやるから。」と、おじさん
は後^{うし}ろへぼくをのせると、走^{はし}りだした。

「N^{エヌ}くん、こんなようなことも、あつたんだよ。」と、K^{ケー}がいました。

だまつてK^{ケー}の話をきいていたN^{エヌ}は、たばこの火^ひがきえたのも知らなかった。

「だれにも、にたような話^{はなし}はあるのかな。それで、苦^{くる}しい世^よの中^{なか}と思^{おも}つても、なお生^いきようとするのは、いつか、いい人^{にんげん}間にめぐりあえるような気^きがして、美^{うつく}しいゆめがもてるからですね。」

N^{エヌ}は、こた^{こた}こう答^{こた}えて、上^{うわぎ}着^ぎのかくしから、なにかとりだしました。それは、手^てぬぐいにつつんだ鏡^{かがみ}のかけらでした。

「きみ、それは、どうしたの。」と、K^{ケー}がきいた。

「あすこで、ひろったのです。K^{ケー}さん、この町^{まち}はわたしに思^{おも}い出^で

がふかいんです。「と、こんどはNが、そのわけをKに話してきかせたのです。

わたしは、おふくろがなくなつた後、どうすることもできず、おなじ長屋にすんでいた、あんまさんのところで、せわになりました。わたしの仕事というのは毎日親方の手を引いて、あの町かどのところへくることでした。そして、親方が、尺八をふく間ついていて、通りかかる人が、お金をくれるのをもらったのでした。戦争前は、あすこに大きくてりっぱなカフェーがありました。

夏の日の午後のこと、きゆうに空がくらくらくなって雷がなり、雨

がふりだしました。

「夕立ちだから、じき、はれるだろう。」と、親方はいつて、

二人はカフエーの、のき下へはいり、たたずんでいました。する

と、ぴかりぴかり、いなずまのするたび黒い森や、でこぼこの屋

根が、うきあがつて見えるかと思うと、地球をひきさくような

すさまじい、雷の音がして、わたしはふるえながら、親方の手

をひっぱって、もつとドアに近く身をよせようとなりました。そう

すればたきのようにふる雨が、かろうじてよけられるからです。

このとき、とつぜんドアがあきました。見ると、うすべに色の

長いもとの着物をきた女給さんが、ぱっちりした目をこち

らへむけ、二人を見ながら、

「そこではぬれますから、早く中へおはいんなさい。」と、いつてくれました。

頭あたまから顔かおまでぬらしながら、親方おやかたは、ただもじもじしている
と、そのねえさんは、わたしの手てをとらんばかりにすすめたので、
二人ふたりは、つい、すいこまれるごとく、ドアの中なかにはいりました。
そして、わたしは生まれはじめて、こんなに美しく、かざりた
てられた、たてものの中なかを見みたのです。ふだんは、風かぜのふきすさ
ぶたてもの外そとに立たって、五色しきにかがやくネオンをながめながら、
中なかからもれる、たのしそうな音楽おんがくや心こころのうきたつような歌うたにき
きほれるだけで、煉瓦れんがのかべをへだてて、そこには、どんな世界せかい
があるのか、想像そうぞうすることもできなかつたのでした。

「すこし、おかけなさいな。」と、ねえさんがいつてくれたので、^{ふたり}二人は、かたすみのほうにあつた、テーブルのわきへ、こしをか
けました。

まだ、たくさんの美しい^{うつく}おねえさんたちが、立^たつたりかけたり
していました。わたしは、どこから、こんなうつくしい人^{ひと}ばかり
あつまってきたのかと、ふしぎに思^{おも}いました。わたしが、目^めをみ
はつていると、また、さつきのおねえさんが、きて、

「わたしにも、ちようど、あんたぐらいの弟^{おとうと}があるのよ。さあ、
ひとつですけれど、おあがんなさい。」と、いつて、紙^{かみ}にのせて、
おかしをくれました。親^{おやかた}方は尺八^{しゃく}をにぎりうなだれていたが、
それに気^きづく^きくと、わたしにかわつて、礼^{れい}をいつてくれました。

しばらくすると、雷かみなりも雨あめも、わすれたようにやみました。二人ふたりが、外そとへ出でるころは、だんだん、客きやくがたてこんで、あちらでも、こちらでも、笑わらい声こゑがきこえ、それとまじって、グラスのふれあう音おとがしました。

あのとときから、何なん年ねんたったであろうか、戦せん時じ中ちゆう、空くう襲しゆうで、このあたりは焼やけ野原のはらになってしまいました。きょう、カフエーのあとで、この鏡かがみのかけらを見みつけて、ひろいあげると、おりから空そらにあらわれた赤あかい雲くもがうつつて、わたしは、おねえさんのすがたを思おもいだしたので、記き念ねんにしようとポケットに入いれたが、考かんえれば、やはりつまらんことですね。

と、Nはエヌいつて、そのかけらを道みちばたになげすてました。

Kはケーこの話をはなしきくと、なんとなくNを、他人たにんのような気きがしなくなつた。そして、早くはやから親おやをなくした子こというものは、すこしかわいがつてくれるものがあれば、こんなにも恋こいしく思おもうものかと、つくづく感かんじたのでした。

「そうさ。むかしのゆめなんか、なんにもならんよ。ふきとぼして、希望きぼうをいつよだいて強つよく生いきぬこうぜ。ぼくたちは、もうはたらくる年としになつたんだもの、だれからも、ばかにされされない。これから、おたがいに力ちからになろうよ。」と、NはエヌはげますようにKはケーいきました。

「ああ、ゆかいだ。きみと、どこへでも、いつしよにいきましょう

う。「と、NがKの手をにぎると、Kもまたかたくにぎりかえしました。

かれこれ、休み時間が、きれたとみえます。あちらから、トコはしの走ってくる音おとがしました。すると、一同どうが立ちあがった。
二人ふたりも、また、元氣げんきにシヤベルをもちました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「少年少女の広場」

1949（昭和24）年3月

※表題は底本では、「はたらく二一少年《しょうねん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はたらく二少年

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>